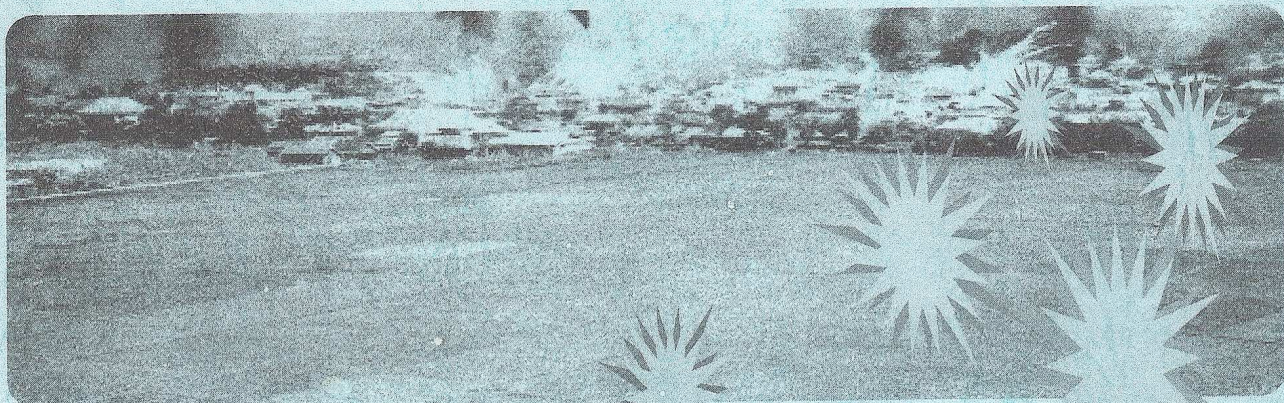
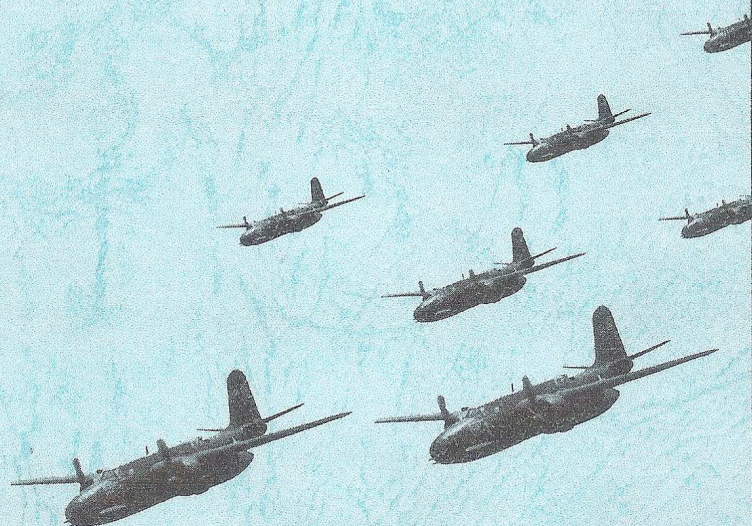


資料-10-2

昭和二十年八月十一日

母校焼失

その日その時



歴史の中の二三歳・死地からの脱出 終戦4日前の忘れ得ぬ記憶、そして残したい追憶

高・昭26年卒 岩下 正弘（生駒市在住）

昭和20年8月11日の正午過ぎ。竜門の山陰から、突如、飛来した敵機の機銃掃射と爆撃によって、多くの同輩や先輩が傷つき、あるいは死んで行った。私が敬愛し、防空壕掘りを共にお手伝いした、当時四年生

で、同郷の稗田親治兄も即死された。小学生の頃からの憧れであり、古いながらも誇りであった、鹿児島県立加治木中学校の校舎は、跡形もなく焼かれ、全てが灰尽と化してしまった。

あれから六十年、この夏に七十三歳を迎える今も、あの悪夢は、つい昨日のことにように思い出されてならない。世界大戦が終結する僅か四日前に、何故、多くの尊い命が断たれねばならなかったのか。何故、小さな町の家々までもが焼かれ、平和な家族が路頭に投げ出されなければならなかったのか。戦争の不条理は、一九四五年八月六日、九日の広島と長崎への原子爆弾投下をみても明らかだが、しかし、このような、太古からの歴史的愚行は、二十一世紀の今も、戦争や戦略の大義などという名聞の下、様々な国家権力的・民族的・宗教的な主義主張やテロリストのゲリラ的な暴力によって、世界各地で繰り返されている。この戦争という歴史事象が、いまだに理解できないまま、個人に降りかかった一連の出来事のみが脳裏を離れないでいる。そこで、あどとき、瞬時、乏しくも強烈に刻み込まれた、脳裏の残映を、前後に引き伸ばして追憶し、振り返ってみることにした。

空襲はまさしく急襲であった。警戒警報発令のサイレンも自覚しない間に、空襲警報もないまま、なんらの心の準備も無いままの襲撃であった。いきなり、プシュッ、ー、ー、ピュン、ー、ー、という、生まれて初めて、間近に聞く機銃掃射の弾の音と共に、教室の窓ガラスが割れ、飛び散る音、低空飛来機の爆音、甲高い人の声が耳に届いた。その瞬間、私は、飛び散る窓ガラスと敵機飛来の方向に頭を向け、教壇のテーブルを盾にして伏せていた。回りに凍りつくような静寂を感じた次の瞬間、きな臭い、何か紙か木片の燃える匂いが鼻を突いた。その時、廊下を駆ける足音がして、「ダイヒール、退避！ 外に出よ！ ー！ ー！ ー！ ー！」と叫ぶ切羽詰まった声が一年五組の教室へ迫ってきた。あれは四組担任の永里先生の声だ」と察した。そのとたん、私は教室を出て廊下北側の入り口へ走った。入り口の屋根は既に勢いよく燃えていた。一瞬の判断は、西堀近くの防空壕が頭をよぎったが、かねてからの父親の指示に従った。その後は無我夢中で、北の裏門へ走った。棟を南北にした、裏校庭西側の農業倉庫も燃えていた。畑にされていた広い裏校庭も、植えられたサツマイモの青い葉

っぱに火がついて一面燃えていた。

落下傘のようなものが付いて、ふあふあ落ちてくる黒い物も見た。豚の悲鳴も聞いたように思う。北門を出て、反土の町へ続く狭い道を横切り、五〇メートル先の、一軒屋の大きな梅の木の本陰にあった、狭い農業用水溝に飛び込んだ時、やっと自分が生きていたことを自覚した。

ふと気が付くと、当時、国防色の背囊鞆が入手出来ず、代わりに姉が白い帆布で縫い繕ってくれた背囊鞆を、あの緊急退避の錯乱状況の中で大事に持ち出していた。中には、まだ食べていなかった弁当や文房具類も詰まっていた。少し、ほっとしたように覚えている。

しかし、その安堵も束の間、第二波、第三波の襲撃を受けた。機銃掃射の弾の音は、遠いように感じた。

今度は、シュツ、シューツ、シュー、シューという機関車の蒸気音のような、これは、既に経験していた、爆弾が焼夷弾の落下する音が何回か頭上を走った。私は、何故かその時も、南北に流れる溝に伏せて、竜門の山陰から急降下する敵機の背面、操縦席を、瞬間、垣間見る姿勢で、背囊

鞆の白色が見えないように胸の下に敷いていた。双胴の戦闘機や双発の爆撃機の機影は、操縦士の人影が認められるような低空をかすめては去って行った。その間、どれほどの時間が経ったかは分からない。爆音の気配が去り、後ろの南の方角を振り返ると、校舎も町も猛煙と烈火に覆われ、一面、火の海と化していた。

その地獄と自分との距離は、二〇〇メートルと無かった。危険との距離を悟ったのか次の瞬間には竜門の山麓を指して溝を飛び出していた。

飛び出した先は、身を隠すものなど何ひとつない一面緑色の稲田であった。また何時飛来するか分からない敵機の気配に全神経を集中しながら、狭い畦道を踏み外しては水田に転び、立ち上がっては走った。道順も分からない初めての畦道を、目安の最短距離で、目的地の山麓へ結びつけては、段差の大きい土手を飛び、行き詰っては小川を渡り、やつとの思いで山林に入った。森に覆われた山に入って、全身の力が抜けたのを覚えている。

山麓の森には、既に二三十人の人がいて、無言のまま佇み、あるいは

しやがみこみ、あるいは横になつて

いた。私が放心状態でみたもので、今でも脳裏に焼き付いて離れないが、それは、まだ年端もいかない少年が首の当たりに受けた弾の痛々しげな傷を必死に止血していた軍服姿の悲壮な顔であった。あの時、私も一三歳と二カ月一〇日の少年、回想するに、あの瀕死の少年と自分とあの日の出来事は、ただの偶然の一片の歴史事象として片付けていいものだろうか。

敵機の気配が全く去り、人々が森を出るのに誘われるようにして山麓を後にしたのは、午後の四時頃だったと思う。私の家は、加治木から東へ「滝口坂」と呼ばれる峠を一つ超えた隼人町の小浜で、竜門の山麓からは、少年の足で歩いて一時間半はかかる距離であった。山麓から蔵王岳を指し、日本山川の川上を渡り、右岸を南下した。途中、日本山

鉄橋の川上五〇〇メートル当たりの堤防で目撃したものは、これも、少年の初めての経験としては、あまりにも、衝撃的で、残酷なものであった。そこには、筵が掛けられ、足しか見えなかったが、子供のものと思

しき死体が横たえられていた。僅かに

にかいま見ただけなのに、いまだに、あの焼けただれた足の皮膚の捲れを忘れることはできない。おそらく、空襲の直前まで、無心に川泳ぎを楽しんでいた童たちが、焼夷弾で川面を火の海とされ、何が起こったのかも分からないまま天に召されてしまったのであろう。

日本山鉄橋の所で、峠への道へ左に折れた瞬間、こちらを目がけて走ってくる人影が目に入った。「父さん」と叫んだ時にはこちらも脱兎のごとく駆けていた。父に抱き寄せられたあの安堵感、涙を浮かべた父の顔は、これも昨日のことのように鮮烈に蘇ってくる。

父は空襲が始まると、居ても立つても居られず、家を飛び出し、峠を超えて、日本山の集落まで来て、四、五時間ずうっと、私の生死を気に揉みながら待ち続けてくれたようであった。今から回顧するに、私が、あの燃え盛る教室の入り口を飛び出した瞬間の判断で、防空壕への退避ではなく、「町を背に山麓を目指せ」という父親のかねてからの教示を実行したのは、あの安堵の瞬間に感じ

たと同じ、父親のさりげない愛情に支えられた日常の堅実な教訓に対する信頼であつたように思う。

私は、父に寄り添って、峠を超える道すがら、空襲の一部始終を話した。話は、私がゲートルを外す間も、また、灯火管制の下、真夏のこととて、火のない囲炉裏端でも続いた。母は、ゲートルを外した私の向膺のいたるところにできた青い痣を撫ぜながら、何で、中学校の先生方は、こんな危ない時に、また、夏休みの頃だというのに、期末試験などやられたのだろうか」と首を傾げ、それにしても、命からがら逃げるのに、本や弁当まで鞆に入れて、よう持ち帰えたものだ」と息子の冷静さを褒めてくれた。隣人の無事を喜んで炉端を訪ねてくれた近所の小父さんは、機銃掃射の教室や梅の木陰の水溝で、敵機の飛来方向へ平行して身構えた、姿勢の合理性に感心してくれた。そして、物陰もない広い稲田の畦道を駆け抜けた単独行動の大胆さにも驚いてくれた。父は、手掘りの防空壕が機銃掃射に対して脆いことと、加治木が空襲を受ける時は、必ず、北の山陰から襲撃される

と、言うことを確信をもつて計算していたようだった。それは、加治木に先だつて受けていた小浜に対する三回の空襲から得た経験に基くものようであつた。

小浜は、なぜか早い時期から空襲を受けており、これが、当日の空襲時における、瞬時の判断や行動、態度に結び付いていたように思われるので、幾つかの事前の空襲体験を追憶しておきたい。また、私も教育者の端くれとして、戦争や戦時教育を称賛するつもりは毛頭ないが、小学校の頃から戦争の疑似体験を施され、中学に上がった時、意識には既に大人の自覚があつた。その若干一三歳の少年の当日の判断・態度に、当時の学校教育での体験なども関連させて回想しておきたい。

私の郷里小浜は、400世帯余りの小さな村で、小学校には、六年までの6クラスと高等科2クラスの計430人程が通つていた。軍事施設などは全く無かつたにも関わらず、昭和20年の3月半ば頃には、グラマン戦闘機による機銃掃射の空襲を受けた。攻撃目標となつたのは、小浜の明石から加治木の黒川河口へ連な

る高い断崖と深海の淵、通称「棚」と呼ばれる山陰の自然港に鹿児島港から退避していた小型艦船と、村のほぼ中央の国道横の広場に駐車していた数台の軍用車両のようであつた。私は、雁形4機編隊のグラマン戦闘機が、一列の戦闘隊形になつて、次々に、明石の山の上空から急降下するのを、自宅の庭の柿の木に登つて見ていた。そして次の瞬間、遠くで、パンパンパーンという敵機の機銃掃射の音とボン、ボン、という艦船からの機関砲の音が交錯するのを聞いた。2キロメートルほど先の出来事ではあつたが、これが、生まれて初めて見聞きした交戦の体験であつた。急いで駆けつけて来た父親の怒号に一喝され、庭の防空壕に入つた時には、恐らく、広

場の軍用車両が狙われたのである。敵機の急降下爆音と機銃掃射の音が響き、防空壕の土壁の砂が落ちた。家から広場までは、五、六百メートルも離れていたが、広場近くの民家や防空壕は、弾が屋根を破り、床を射貫いていた事を後で聞かされ、冷や汗の恐怖と機銃掃射に対する手掘りの防空壕の脆さをまざまざ

と認識させられていた。この時の父子の体験が、死地からの脱出時に、防空壕を避け、山陰を指した瞬時の判断に繋がつたのであろう。

小浜の第二回目の空襲は、五月の末頃であつたろうか。麦が黄褐色にいろづいた頃だったと記憶している。夜間の急な空襲で、山腹の岩を掘削して造つた横穴式の防空壕に行く間もなく、心もとない庭の防空壕に入った。そこで、相当長く感じたのを覚えていたが、不気味な青白い照明弾が夜空に漂っているのに怯えていたら、いかにもわが家が燃えているかと紛う程、壕の外が急に赤く見回つた。その時、早鈴神社という鎮守の社に近い農家の一軒屋が全焼してしまつた。小学校の同級生の女の子の家だった。あの時の哀れな悲しみが思い出されてならない。だがこの体験は、空襲に対する少年の敵愾心と大人の胆力を培つてくれたやうで、緊急脱出時の冷静な落ち着いた態度に繋がつていたように思われる。また、この時の空襲が焼夷弾攻撃であり、麦畑の燃え方から、六角形筒形の長さ50センチほどの焼

夷弾が、柔らかな土にくい込むと焼ける範囲が小さいことも学習していた。しかし、この体験は、必死の脱出時に、校庭のイモ畑の燃え方や落下傘の付いた大きな焼夷爆弾を認識することには繋がらなかった。

第三回目の空襲も期日は定かに記憶していないが、六月末頃ではなかったかと思う。その時は、小浜を囲む丘陵山地の北側に位置し、高圧電柱などが頂上に望まれる小高い尾根の、麓の田圃から山頂付近の山一帯にかけて、沢山の時限爆弾が投下された。その時、私は、上級生の稗田兄と一緒に、“滝口坂”峠近くの山陰で、徴用労務者の横穴式防空壕掘りの手伝いをしていた。着弾地域と壕の距離は、直線距離にして七、八百メートルから一キロはあったろうか。それでも、瞬間、熱風すら感じたように記憶する。中学校の猛炎を背に、農業用水の溝の中で聞いた、あの、機関車の蒸気音のようなシュツ、シュツ、ーという音は、まさしくこの時の体験であった。時限爆弾は、ほぼ投下時から一月ばかりかけて、散発的に爆発し、村人を恐怖させた。

これら一連の体験が恐怖の脱出時に一三歳の少年の決断と行動に繋がったことは確かだが、緊急脱出時の不思議なほどの落ち着きと、竜門の山麓を目指して、隠れる物陰ひとつない広い田圃の畦道を一人で走ったあの勇氣はどこから来たのだろうか。

今から回想するに、一三歳の少年の自覚はまさに大人であった。小学校の五、六年次には、すでに、周囲の大人達は、子供の覚束無さに、痛々しさを覚えながらも、軍事教育を真剣に施そうとしていた。小学校六年生の頃には、海洋少年として、15人乗りカッターの操船訓練を施したり、模擬の戦争教練なども行った。私が通っていた小学校は、海に程近く立地し、艇を2艘ほど有していた。波の荒い日でも、長浜の沖や明石の“棚”の近くまで出掛け、強い風と高い波に直角に向かって操船する知恵と勇氣と冷静さを覚えたように思う。そしてこの経験が空襲時の私の行動を支えてくれたように思う。翻るって加治木空襲の前後を追憶しておきたい。空襲当日は、朝からよく晴れて、日差しの強い日だった。平時なら夏休みの時期というの

に、戦時奉仕活動や警戒警報、空襲警報の発令による休みが多かったためか、意外にも、期末の試験が予定されていたように記憶する。当時、日常茶飯事化していた警戒警報が何回か発令されては解除されていた。

そのせいか、徒歩や自転車通学の殆どの生徒は登校していたが、一五歳以上の“国民義勇隊”として何らかの軍の統制下にあったとみられる三年生、四年生や、汽車通学など、遠方からの生徒は、汽車が動かず、遅れたり、欠席した人が多かったように思う。そこで、試験は中止となり、担任の先生の戦時訓話や敵宣伝活動などに惑わされない注意などがあり、教室や校庭の清掃作業が終わった後は、下校していい手筈になっていたかと記憶する。私は、その時、浜田實先生担任の1年5組の教室で、帰り支度を先に済ませて、雑巾掛の拭き掃除をしていた。私の教室は、東西三棟の、一番北棟の西の端にあった。棟の北側に長い廊下があり、廊下は私の教室の前でL字形に折れていた。その教室前の短い廊下の南と北に入り口があり、私が脱出したのは、この北側の入り口であつ

た。南の入り口を出た所に便所があり、便所の北側に、校地の西塀に沿った四、五個の手掘りの防空壕が並んでいた。私が咄嗟の判断で入壕を避けたのはこれらの防空壕であった。

戦時体制に組み込まれた、恐ろしくは最高学年の特別な使命感で、猛火の教室に殉死された、四年生の稗田兄の葬儀が、悲しみの中で、とり行われたのは、空襲の二日ぐらい後のことであつたろうか。その後、二年生の上級生から、“明日は万難を廢して登校せよ”という学校からの達しを聞かされた。この日が終戦の詔勅が下された日だったかどうかは定かな記憶にはない。しかし、今も脳裏を離れないのは、まだ焼け跡の臭気が強烈に鼻を突く、殺伐とした学校敷地の光景であつた。グラウンド西側スタンドの大楠も、枝葉はすっかり焼け落ち、黒い幹だけが残っていた。校舎は、黒く焼けた敷石以外、何一つ跡形も残っていなかった。用務員室の焼け跡に、無気味に横たわっていた、1トンはあろうかと思しき、大型の焼夷爆弾の鉄皮だけが、異様に感じられたのを思い出す。何か、言うに言われぬ空しさと悲哀を

感じた。

中学校の敷地は、西塀も壊れ、西隣の蛇城小学校まで、荒涼とした広い焼け跡が見渡された。南の校門は、一面の焼け野ケ原の町に続いていた。終戦僅か四日前の、敵の「戦略」意思が、掛け替えの無い、幼い、若い命、また、町では身の不自由な老人の命をも、建物とともに一気に奪ったことになる。

国家権力の「目的」や民族の「正義」、神の意思に基く「神聖」な戦

争などと言う「大義」の下で、永い歴史はどれだけの人間を殺してきたのだろうか。また、これから、どれだけ貴重なものを破壊し、殺戮を繰り返すのだろうか。弱肉強食の自然の理の中で、平和な時間が少しでも永続するよう努力したいものである。

